

めて、自分がそれまでずっと暗い道を歩いていたことに気付き、そして時の経過が私を癒してくれたことを感じました。それから母のことを、涙なしに懐かしむことが出来るようになっていきました。

けれどもその半年後の春、今度は父がくも膜下出血で突然倒れました。一人暮らしの自宅で発見した時には、すでに昏睡状態でした。

奇跡的にも父は一命を取りとめたものの、歩くことも意思を伝えることも難しい状態となりました。「寝たきりになってまで生きたくない」と常々言っていた父にとっては、病院のベッド上での生活は本意に違いなかったのですが、父はそれを伝える術を失っていました。私は「とにかく生きてほしい」との思いから医師より提案される父への治療の全てを承諾してきたものの、歩くことも話すことも出来なくなってもなお父を「生かしてしまっている」という罪悪感を抱えながら看病を続けました。

その頃の私は、二歳と六歳になった子ども達の育児と、父の看病に追われる毎日。心が折れそうでも、どうしても私がするしかない数々の現状を前にして、私は次第に自らの感情を抑えるようになりました。辛いと感じることが薄れていったものの、目からは理由の分からない涙がぼろぼろとあふれてくる日々が続きました。

二年半の入院生活の末、父は最期の時を迎えました。緩やかに消えていく命に寄り添った数時間は、ただ静かに時が流れることを願いながら、穏やかに過ぎていきました。生きている人の体の温もりや一秒一秒の時間の長さを、あれほど尊く、そして愛おしく感じたことは私の人生の中で初めてのことでした。

父が亡くなった後は、最期まで看取ることができた安堵感を持ちつつも、多忙な日常の中でふと出来た隙間には悲しみが込み上げてくるという、不安定な心情が続きました。そんな中、両親の遺品整理を始め、両親が遺してくれたもので一番大切なものは何かと考えだしました。そしてそれが、「私自身の命」だということに気付いたので。私の中には確実に、両親の暮らしぶりや考え方が息づいています。私自身が日々を大切に生きることが、両親がこの世に生きていた証であり、思いを受け継ぐことだと思えた時、私の中に新たな二つの命が宿ったように感じました。

今でも、お正月やお盆の時期に実家へ向かう家族連れや、祖父母と手をつないで歩く子どもの姿を見ると、両親を亡くしている私の心は痛みます。けれど、その痛みはきつと時の経過が和らげていってくれると信じています。姿はなくなっても、思いは生き続ける——悩んだ時には自分の心の中にある両親に尋ねると、不思議と答えが返ってきます。嬉しい時には、両親の笑顔が浮かんできます。「亡き人と共に生きる」とは、そんなことなのかもしれません。